

社会人のための大学院活用術

最新の現場環境に対応

土肥裕司さん(51) =医療専門学校教員、大分市=

めまぐるしく変化する環境や進歩する技術に、自分に対応していけるだろうか。日本文理大医療専門学校(大分市一木)で教員を務める土肥裕司さん(51)は危機感から、大学院で学びを深める選択をした。

変化に危機感抱く

2020年10月から2年間、日本文理大(NBU)大学院工学研究科へ。自身の仕事に生かせる専門知識を得るため航空電子機械工学を専攻、修了した。

土肥さんは長年「医療現場のエンジニア」と呼ばれる臨床工学技士を目指す学生を教えてきた。近年の医療現場では電子機器の小型、高性能化が進み、チーム医療が浸透。臨床工学技士も機器の操作だけでなく、意見が求められるようになってきたという。土肥さん自身が「環境変化に対応できていないのでは」と感じていた中、コロナ禍に突入。「閉塞感を打ち破るた

めにも前進を」と、思い切って入学を決めた。

人工呼吸器や心臓カテーテル装置といった機器の最適な使い方を、チーム医療現場で提案できる学生を育てるためには、何を学ぶべきか。担当教授2人から「専門家として生きていくのであれば、業務に必要な分野を重点的に極めてみては」と助言があり、震動工学と流体力学に焦点を絞った。

思考の幅が広がる

平日は午後6時まで仕事をし、すぐに大学院に移動。同9~10時ごろまで、学習や研究に励んだ。週末も研究室に行き、作業をした。



大学院修了後も研究を続ける土肥さん。「1~2年以内に論文を発表したい」と意気込む

大学院での学びは、自身の仕事のスタイルも変えた。研究を通してさまざまな考えの人と出会い、時には正反対の意見の人とも議論を重ねた。自然と思考の幅が広がったという。土肥さんは「学生に分かりやすく教えることに加え、個々の特徴に合わせた学び方の提案を考えるようになった」。

「午後6時以降に講義時間を取ってもらうなど配慮してもらい、働きながら学ぶことができた。今でも好意で研究を継続させてもらっている。あと1~2年で論文を発表したい」と土肥さん。自身の学生には大学院での経験を還元し、地域医療に貢献できる人材を育てようと意気込んでいる。